

○山手線の駅A（夜）

横手川（25）、バッグを担いで改札から出てくる。

立ち止まり、駅前広場を見渡す。

酔っぱらいがやかましく喧嘩しているのが見える。

横手川（VO）「どこもかしこも。静かに生

きさせてくれよ、ちくしょう」

横手川、歩き出す。

○マンガ喫茶の受付を済ませる横手川（夜）

○同・個室（夜）

横手川、イスにもたれて寝ている。

○モンキーストア・外（深夜）

コンビニ・モンキーストアの看板。

パンすると、“家庭ゴミの持ち込みは固くお断りします”との張り紙の貼られたゴミ箱がある。

その横に誰かが家庭ゴミを捨てていく。
店員の永瀬（26）、店内からタバコ
を手に出てくる。

タバコに火を点け、吸う。

家庭ゴミに気付いて、溜め息。

それを手に持って、向かいにあるコン
ビニ・ドギーマートに向かって道路を
渡る。

家庭ゴミをそのゴミ箱の横に置く。

山下「持って帰れ、そっちのゴミだ」

振り返ると、ドギーマート店員・山下
（39）が立っていて、スマホで永瀬
を動画撮影している。

永瀬「いや、ウチだって押し付けられて…」

山下「毎日毎日たらい回しか。良い度胸じゃ
ねえか。まあ好きにしろ。映像はそっちの
本部に送らせてもらうぜ」

間。

永瀬、ゴミを持ってモンキーストアに
戻っていく。

山下「最後通告だ！　ボスに言つとけ！
今度俺の店に手え出しやがったら容赦し
ねえつてな！」

○朝日が昇る

○土手（朝）

横手川、タバコを吸いながら川を眺
めて歩いている。

○大通り

警官に職務質問されている横手川。

横手川「横手川。横手川昌広」

警官「なに、この辺り住んでるの？」

横手川「ないんですよ、家」

警官「仕事は？」

横手川「それもない」

○公園のベンチで寝ている横手川（夕）

○住宅街（深夜）

横手川、ブラブラ歩いてくる。

ドギーマートの前で足を止め、自動

ドアに貼られた求人広告を見る。

横手川（VO）「物の分かったヤツは、我慢

すりゃいいって言うけど」

諦めたような表情浮かべ、店に入る。

○T「10」

○ドギーマート・売り場（深夜）

白河（55）、週刊誌を立ち読みしながら、レジを眺めている。

そこでは店員となった横手川が山下と共に酔った高校生三人と揉めている。

カウンターのの上には缶ビールの数十本入ったカゴがある。

横手川「ですから、法律なので、身分証明証をご提示いただかないと——」

高校生A「いやいやいや！ ないない！」

高校生B 「(窓の外に見えるモンキーストア
指して) 向こうの人、こっちで買えって
言ってたよ」

山下の表情が険しくなる。

横手川 「申し訳ありませんが——」

高校生B 「こっちで買えって」

横手川 「申し訳ありませんが」

高校生C、横手川を睨む。

と、缶ビールを手に持って店を出よう
とする。

山下「おい！ 戻せ！」

高校生A・B、笑う。

高校生C、立ち止まって山下睨む。

高校生C 「あ？ なんつった今」

高校生B 「お？」

山下「商品を戻して下さいと言ったんです」

高校生C 「な言い方してねえだろ」

高校生A 「ヤバイヤバイヤバイ」

山下「：申し訳ございませんでした」

間。

高校生C「土下座しろ」

山下「申し訳ございません」

高校生C「土下座」

高校生A「土下座土下座」

高校生B「早くう」

山下、高校生たちを睨みながら土下座する。

山下「申し訳ございませんでした！」

高校生A・B「ウエイ！」

高校生C、笑ってスマホで山下を写真に撮る。

手に持った缶ビールを床に放って、

高校生A・Bと共に出て行く。

山下、ゆっくり立ち上がり、窓の外のもんキーストアを憎々しげに眺める。

横手川「：すいません」

山下「すいません。すいませんか。：すいませんの一言で許されるんだから新米はいいよなあ！俺に責任押し付けりやいいんだもんなあテメエみてえなクズはよお！」

横手川 「(ムっとして) : すいません」

○T「9」

○モンキーストア・売り場 (深夜)

永瀬の立っているレジに、山下の母
(69) が週刊少年ジャンプを数十冊
積み上げる。
呆気にとられている永瀬。

山下の母「下さい」

○同・事務所 (深夜)

店員・緒方(45) が寝ている。テー
ブルの上にはビールの空き缶の山。
永瀬、ドアを開けてそれを見つめる。

○同・売場 (深夜)

山下の母のいるレジに戻ってくる永瀬。
永瀬「9580円です」

○T「8」

○モンキーストア・事務所（夜）

店員・岡島（32）、制服に着替えながら永瀬と話している。

岡島「（笑）なにそれ、業者？」

永瀬「いやわかりませんが」

岡島「一人一点とか言っちゃえば良かったのに」

永瀬「すいません」

岡島「なにい、やめてよお。いいよそういうの。どうせバイトなんだし」

永瀬「はあ」

岡島「（ニヤけて）アイツらかな？」

永瀬、少し表情を曇らせる。

○ドギーマート・売り場（深夜）

横手川、フライヤーを洗っている。

店員・小野寺（34）、レジに立って

横手川に話し続けている。

小野寺「どうにかなんないの？ アレ。グチグチグチグチうるせえのなんの。こつちまで頭おかしくなっちゃうよ。ねえ？

アレだね、なまじアレ、山下のバカもバイト暦だけ長いからさ、店長も何も言わないんだわ。アレも使えないんだホント。使えないからこんな辺鄙なところで店長やってんだわ。普通じゃないもん、アレ」

横手川「…」

○同・外（深夜）

ひとけも交通もない。

横手川、ガードレールに座ってタバコを吸っている。

ふとモンキーストアを見る。

外でタバコを吸ってる永瀬と目が合う。
横手川、タバコを揉み消し店内に戻る。

○同・売場（深夜）

横手川が入ってくると、客のカズと

ゴン（共に25）、レジで小野寺と揉めている。

他の唯一の客は立ち読みしている白河。

ゴン「（おにぎり手に）現に期限が切れてるじゃねえか。お前、腐ったおにぎり売ったのか」

小野寺「いえ腐ってるわけじゃ——」

カズ「消費期限は食べられる期限を定めたものだよね？ そうだよね？ だとすると消費期限切れの商品は食べられない、つまり腐ってるのと同じことじゃない？」

間。

小野寺「（頭下げ）申し訳ありません」

ゴン「ありませんじゃねえございませんだろ
バカ野郎！ 店長呼べえ！」

* * *

山下、ゴンとカズに土下座している。

カズ「店長なの？」

山下「バイトリーダーです！」

ゴン「アホかあ！」

* * *

ゴンとカズ、出て行く。

山下たち三人、頭を下げてそれを見送っている。

間。

三人、頭上げて、

山下「（横手川見て）お前なにしてた」

横手川「は？」

山下「小野寺はいい。確かに悪いのは小野寺だが、客に誠意を見せ、反省してる。お前はその横でなにしてた？」

横手川「いや——」

山下「なにをしてたかと聞いてんだよ！

会社組織は運命共同体だ！ 助け合わねえでどうやって生き延びるつもりだ！

テメエ外資気取りか！」

横手川「：すいません」

横手川、横目で小野寺を睨む。

小野寺、すつとぼけて視線を逸らす。

山下「バケモノ呼びやがって……」

○同・事務所（深夜）

ゴンとカズの映った監視カメラの映像
を見ている三人。

山下「屁理屈のカズと言葉尻のゴン。業界
じゃ有名なクレーマーコンビだ。ヤツらは
食らいついた獲物は離さねえ。長い戦いに
なるぜ」

横手川「そうですか」

山下「分かっちゃいねえな。だからテメエは
新米なんだ。ヤツらは決して法のボーダー
ラインは超えねえ。クレームを入れ、名前
を伏せてツイッターに上げる。ヤツらが
するのはそれだけだが、そこらが本番だ。
二人がツイッターにクレーム・データを
上げりや、すぐさま祭り好きなネット十字
軍どもが動き出す。スレ立て、店名・店員
の特定、情報の拡散、クレーム電話・メー
ル攻撃、殺害予告。バカな連中だぜ。だが
バカだからこそタチが悪い。ヤツらカズと
ゴンに踊らされてると気付いてもいねえ」

山下「裁いてるつもりで、その実裁かれるハメになるのはソイツらだ。カズゴンの鉄砲玉となつてな」

横手川「怪獣じゃねえんだから……」

小野寺「こりやあエライことになつたぞ」

山下「純粋なクレーム衝動に突き動かされた怪物。クレーム業界のアルカイダ。それがカズとゴンだ。本部は手を引くだろう。俺たちのクビと引き換えに手打ちに持ち込むはずだ。俺たちは孤立したぜ」

○マンガ喫茶（深夜）

受付の店員に食って掛かるゴンとカズ。

カズ「清掃なんてそっちの事情だよね？」

だって、深夜帯は食べ物提供出来ないって受付のとき言った？　言っていないよね？」

店員「いや、だから——」

ゴン「だから？　ですからだろ？　おい店長呼べえ！」

○T「7」

○モンキーマート・売場（深夜）

山下、誰もいないレジに、叩きつけるようにガムを置く。

傍らに不機嫌な表情の横手川がいる。

山下「すいませーん！」

岡島、事務所から出てくる。

岡島「はあい：あ、山下さん。どうもどうもお久しぶりです」

山下「そのきたねえツラを下げろ！」

岡島「（笑）ドギーさんは失礼ですねえ」

山下「ふざけてんじやねえぞこの野郎！」

事務所から永瀬出てくる。

岡島「（永瀬に）あ、平気平気、なんでもないから：そうだ、この前凄かったよね。（山下に）なんかジャンプ一人で買い占めた人がいて。いや困りましたよお。営業妨害もんだよなあ。まあ、関係ないですけどね。俺バイトだし（笑）」

ね。俺バイトだし（笑）」

山下「いい気味じゃねえか。テメエの悪行に
対する罰だぜ」

岡島「え？ なんの話です？」

山下「しらばっくれんじゃねえ。屁理屈の
カズに言葉尻のゴン。テメエが呼び込んだ
のは分かってんだよ！」

岡島「はあはあ、なんのことやら…えーと、
屁のカズ尻のゴンでしたっけ？ あ、でも
なんかそれ、聞いたことあるな。怖い人
らしいですねえ。なんかほら、2ちゃんの
クレーム板とかで話題に上がってる店舗に
突撃するとか。ドギーさんも話題に上がっ
てたんじゃありませんかあ？（笑）まあ、
普段の態度がアレだから」

間。

山下「今日はお前にとって忘れられない日に
なるぜ、岡島。リメンバー・パールハー
バー。俺を本気にさせたことを後悔するん
じゃねえぜ（横手川に）行くぞ」

山下と横手川、出て行く。

岡島、腹を抱えて笑い出す。

○ドギーマート・売り場（深夜）

小野寺、レジに寄りかかってマンガ雑誌を読んでいる。

横手川と山下、入ってくる。

小野寺「どうだった？」

山下「：二つ選択肢がある。黙ってヤツらに屈するか、あくまで気高く戦うか。俺のハラは決まってるが、俺たちは運命共同体だ。意見を聞こうじゃねえか」

横手川「変なことはやめた方が――」

小野寺「やっちまおうよ！ ヤマさん！」

山下「よし！」

横手川、うんざりした表情。

○同・事務所（深夜）

横手川と小野寺、ラップトップPCでネットを見ている。

山下、傍らでそれを見つめている。

山下「徹底的に調べろ！ あのクソ野郎、後ろめたい過去があるはずだぜ！」

○同・外（深夜）

ホームレスがゴミを漁っている。

山下、来て、万札を差し出す。

山下「金を貰うか、追い返されるか。お前が選べ！」

* * *

横手川、面倒くさそうにトイレのドアに「故障中」の張り紙を貼る。

腕を組んで窓の外のモンキーストアを睨みつけている山下。

客「（入店して）すいません、トイレ——」
山下「故障中ですのですいませんがお向かいのコンビニにどうぞ！」

○朝日が昇り、小鳥がさえさる

○ドギーマート・外（朝）

勤務を終えた横手川、出てくる。

忌々しげに溜め息を吐く。

歩き出そうとして、

山下の声「新米」

振り返ると山下がいる。

横手川「なんすか」

山下「付いて来い。おごってやる」

横手川「結構です（歩き出す）」

山下「付き合いも仕事だ！ 来い！」

○牛丼チェーン（朝）

横手川と山下、席に座っている。

あくせく働く店員・涼子（25）を

ジッと見つめている山下。

不機嫌そうな横手川。

涼子、牛丼持ってやってくる。

涼子「お待たせしました」

山下「忙しそうだな。ワンオペか？」

涼子「（笑）もう慣れましたねー」

山下「大した根性だ。ウチで働かないか？」

山下「こいつの代わりにさ」

涼子「あははー」

山下「なあ、ところで――」

涼子「あ、すいません」

涼子、走って厨房に戻る。

山下「：イイ女だ」

横手川「（牛丼食べながら）そっすか」

山下「ああ、イイ女だ」

○T「6」

○モンキーストア・売り場（深夜）

永瀬、レジに立ってモジモジしている。

トイレのドアが開き、客が出てくる。

永瀬、トイレに向かう。

立ち読みしていた別の客、トイレに

入って行く。

別の客「トイレ借りまーす」

永瀬「：どうぞ」

○ドギーマート・売り場（深夜）

白河、週刊誌を立ち読みしている。

雑誌の品出しをしている横手川。

レジには手持ち無沙汰の小野寺が立っている。

小野寺 「（横手川に）なんだよアレ、ねえ？

はりきっちゃって。気持ちの悪い。大体

アレだよ？ 最初向こうにイチャモンつけ

たの山下だからね。おかしいんだよアレ」

横手川 「：」

電話が鳴る。

小野寺 「横ちゃん、電話あ」

横手川、溜め息吐いて事務所に向かう。

○同・事務所（深夜）

横手川、電話に出る。

横手川 「お電話ありがと——」

男の声 「貴店は消費期限の切れた食品をお客様に販売していると聞いたのですが、本当でしよるか？」

間。

横手川 「すみません、ええと、どういった

——」

男の声 「本当ですか。違うんですか」

横手川 「：いえ、そのような事実はありません

ん」

男の声 「そのような事実はないとおっしゃ

いましたか？ 本当ですか？」

横手川 「：いえ、100%無いとは言えま

せんが——」

男の声 「あるんですか？ 無いんですか？」

横手川 「あの、ごく稀にはある可能性もあり

ますが、しかしそのような——」

男の声 「ちよつと待って下さい。あなた最初

に無いと仰いましたよね？」

横手川 「いや、それはいつもそうでした——」

男の声 「ウソを吐いたんですか？」

横手川 「いえいえ、話を聞いて——」

男の声 「ウソ吐いたんだろ？」

横手川 「いえ、話——」

男の声 「いえ、じゃねえよ。ウソを——」

横手川 「話を最後まで——」

男の声 「論点ずらしか？ ウソ吐いた——」

横手川 「いやだから！ 話聞けって！」

相手は電話を切る。

○モンキーストア・売り場（深夜）

スカスカになった雑誌売り場に張り紙。

“雑誌・書籍の同一商品はお一人様
一点までとさせていただけます”

永瀬と緒方の立つレジに、ホームレス
たちと山下の母からなる行列が出来て
いて、全員タイトルの違うマンガ雑誌
を数冊ずつ手にしている。

○ドギーマート・売り場（深夜）

漫画雑誌を読んでいる小野寺。

客が入店。

小野寺 「（見ずに）いらっしやいませー」

カズ 「トイレ貸して」

小野寺、顔を上げるとカズとゴンが
いる。

小野寺「：お客さんすいません、今故障中で
して、お向かいに――」

カズ「我慢できないんだけど、漏らしたら
責任取ってもらえるの？」

間。

小野寺「あ、そうですか。分かりました！
どうぞお使い下さい！」

白河、三人を見る。

カズ「ちよつと待って、壊れてるんじゃない
の？ 壊れてるトイレをお客様に使わせて、
万一事故にあったらどうするつもり？」

小野寺「いやあ、大丈夫ですよ！ 壊れて
ないですから！」

ゴン「壊れてないもんを故障中と称してお客
様に使わせないようにしてんのかダメエ！

店長呼べえ！」

カズ「待って」

ゴン「ん？」

カズ「とりあえずウンコしてくるから」

ゴン「あ、うん、分かった」

カズ、トイレに入る。

間。

トイレのドアから顔を出す。

カズ「石鹸が入ってないんだけど、手洗わな

いで病気になったらどうするの？」

ゴン「テメエ俺たち殺す気かあ！」

○T「5」

○マンガ喫茶・個室（夜）

動画サイトの1ページ。コンビニの

イメージ映像を背景に、昨日のクレー

ム電話の内容が流れている。

男の声「ウソ吐いたんだろ？」

横手川の声「いえ、話——」

男の声「いえ、じゃねえよ。ウソを——」

横手川の声「話を最後まで——」

男の声「論点ずらしか？ ウソ吐いた——」

横手川の声「いやだから！ 話聞けって！」

それを見ていた横手川、コメント欄に
目移す。

横手川に否定的なコメントが並ぶ。

○ドギーマート・事務所（夜）

小野寺、クレーム電話を受けている。

小野寺「すみません！ はいもう、ホント
すみません！ すみませんでした！」

受話器置く。

すぐさま着信して、出る。

小野寺「お電話ありが——はい、すみませ
んでした！」

○ドギーマート・売り場（夜）

レジに大行列が出来ている。

山下、一人で会計をしている。

山下「（頭下げて）ありがとうございます

た！ またご利用下さいませ！」

女の声「（来て）下さいな」

山下「（顔上げて）いらっしやいませ！」

そこには何冊ものマンガ雑誌の入ったレジ袋を持った山下の母がいる。

山下の母「大丈夫？ 顔色悪いよ？」

山下「：なんでもないよ。買うの、買わないの。早くして」

山下の母「買ってきたよ、トモチちゃんの言っていたマンガ。こんなに読むの？」

山下「早くしてよ。他のお客様が迷惑する」

山下の母「なに怒ってるの？ 最近ずっと怒ってるけど」

山下「怒ってないよ！ 早くしてって！」

山下の母「変なトモチちゃん。あ、そうだ、はいこれ」

山下の母、モンキーストアのフライドチキンを山下に渡す。

山下「なにこれ」

山下の母「お向かいでね、ホラ、トモチちゃんの言っていたマンガ買ったらね、店員さんがトモチちゃんに渡してくださいって」

山下の母 「（笑顔で）お友達？」

怒りに震える山下。

山下 「ぎけんじゃねえ！」

チキンを床に叩きつける。

他の客たち、静まって山下を見る。

山下の母 「（泣き出して）なんで怒るの？

お母さんなにか悪いことした？」

山下 「泣かないでよ！ ああもう！」

○T「4」

○モンキーストア・事務所（深夜）

ニヤニヤしながら山下の履歴書のコピーを眺めている岡島。

その背後で、全身黒づくめの男・黒川（51）、コーヒーを飲んでいる。

緒方、ビール缶片手に寝ている。

岡島 「煌びやかな経歴。底辺ってこういう人のこと言うんだなあ。（黒川見て）どこで手に入れたんです？ こんなのに」

黒川「…」

岡島、笑って、今度は横手川の履歴書のコピーを眺める。

○ドギーマート・売り場（深夜）

立ち読みする白河以外に客はいない。

小野寺、陳列棚を清掃している。

レジに腕組みをして険しい表情の山下。

事務所の電話が鳴り、小野寺が行こうとする。

山下「相手にするな！」

小野寺「ええ？ でも——」

山下「いいから言うとおりにしろ！」

小野寺「…」

入店チャイム。

山下「（入口見て）いらっしやいませー！」

カズとゴンが入ってくる。

小野寺と山下、表情を強張らせる。

カズとゴン、レジの山下を一瞥し、

小野寺に近づく。

アイスのハズレ棒を出して、見せる。

カズ「ねえ、ここのアイスって当たり入ってる？ 当たらないんだけど」

小野寺、山下を見る。

首を横に振る山下。

小野寺、頷く。

小野寺「すいませんが私どもでは判りかねますので、メーカーさんにお問い合わせします」
カズ「分からない？ じゃあお宅の店は、当たり前が入っていると表記のある商品を、仮に当たりが入っていなくてもそのまま売っているってこと？ 中国産なのに国産だつて偽装した商品売ってるのと同じだよ
ね？」

小野寺、山下を見る。

首を横に振る山下。

小野寺、頷く。

小野寺「いえ、そんなことはありません」

ゴン「じゃあ当たりは入ってるんだな？」

お前言ったな？ 絶対入ってるんだな？」

山下、拳を固める。

小野寺「いえあの――」

ゴン「当たりがあるのか無いのかどっちなん
だこの野郎！」

白河「あるよ」

四人、白河を見る。

白河「俺は当たった」

ゴン「誰だテメエ」

白河「タクシードライバーだ」

白河、カズとゴンに近づく。

カズ「ちよつと待って下さい。あなたは関係
ないですから。私と店の問題なので」

白河「ほお？ 俺が立ち読みしてる限り、お
宅らに騒がれるのは俺にとっても迷惑なん
だが、それでも関係ないと言えるかね？」

カズ「ならばこう言いませうか。私はこれ
からアナタのタクシーに乗るかもしれない
潜在的なお客様である。お客様に対して
その物言いは失礼ではないですか？」

白河「俺がそいつを否定したら、次はこう言うつもりかい？俺が粗暴な運転をして通行人に迷惑をかけても、客ではないから関係ないのか？とね」

カズ「…まさにね」

白河「（笑）ああ、関係ないね」

ゴン「テメエ人様の命をなんだと思ってるんだこの野郎！」

カズ「ゴン、行こう。外に彼のタクシーが停まってる。とても不愉快な思いをしたと会社にお知らせしてあげよう。それから、あなたの会社はとても危険なドライバーを雇用しているってね」

白河「おう、楽しみにしてるよ」

カズとゴン、出て行く。

ゴン「安全運転しろバカ野郎！」

白河、立ち読みに戻る。

山下「ありがとうございます！」

白河「あんなヤツに言うこたあないさ」

山下「あなたにですよ！」

○T「3」

○牛井チェーン（朝）

横手川、山下、小野寺、白河の四人、
同じ席で牛井を食べている。

小野寺、自分の牛井のキムチを白河の
牛井に乘せる。

小野寺「どうぞどうぞ、コレ俺の気持ち！」

白河「バカヤロウ、それキムチじゃねえか」

山下「なに言ってるんですか白河さあん！」

三人、笑う。

横手川「：」

山下、牛井に七味をかけようとして、
置いてないことに気付く。

山下「あ：（涼子見て）いいかな？」

涼子「（来て）はい」

山下「七味、ある？」

涼子「あ、すいません。今お持ちします」

山下「ああいや、いいんだ。その綺麗なお手
手を煩わせるのは申し訳ない」

山下「代わりに笑ってくれないか？ 君の

笑顔は最高のスパイスだからな」

小野寺「ヒュー！」

三人、笑う。

横手川「：」

岡島と永瀬、カズとゴン、そして黒川の一団が笑いながら入ってくる。

山下たち、一斉に彼らを見る。

岡島たちも気付いて、立ち止まる。

岡島、山下に微笑みかけて、

岡島「あ、どうもお疲れ様です」

テーブル席に着き、楽しげに話し出す。

山下「仲の良いことだなあ。その面子、ネツ

トに上げたらスクープもんだぜ」

岡島「（笑）俺、友達多いんですよ」

山下「随分物騒なお友達じゃねえか」

岡島「山下さんも一緒に食べませんか？」

山下「ケツ！」

涼子「（岡島の席に来て）いらつしやい

ませー」

岡島「あれえ、髪型変えた？ 前の方が似合

ってたのに」

涼子「あー、分かります？」

岡島「ゴミ付いてるよ、ゴミ」

涼子「え」

岡島、涼子の髪に触れようとする。

山下、立ち上がり、拳銃を抜くように
スマホを抜いて岡島たちに向ける。

同時にスマホのカメラを起動させ、

山下「おい！ そのきたねえ手をどける！」
間。

岡島、山下のスマホのカメラに向かっ
て笑顔でピースする。

山下、岡島に掴みかかろうとする。

白河、それを遮る。

白河「やめときな。撮られてるぜ」

山下、ハツとして黒川を見ると、スマ
ホのカメラでこちらを撮影している。

白河「先に手を出したほうが負けを見る。

それがお宅らの狙いだろう。情報は剣より

強い：そうだろ？ 黒川」

黒川「…」

白河「行くぞ」

白河、店を出て行く。

山下、次いで小野寺も出て行こうと

して、横手川、止める。

横手川「いやいや、お会計」

小野寺「ん？」

○牛井屋チェーソンの外（朝）

山下たちが歩いている。

白河「（タバコに火を点け）なに、ちよつと

した仲でね。黒川マサル。探偵上がりの

社会的殺し屋さ」

山下「ちよつと待ってくれ、なんだってそん

な野郎が…」

白河「さてね。ま、せいぜいあんたら転職先
を探しておくこつた」

山下「え」

コンビニの前まできて、白河、停めて
あつたタクシーに乗り込む。

山下「ま、待ってくれ白河さん！　なあ！」
タクシー、去る。

OT「3」

○ドギーマート・外（深夜）

白河のタクシー、やってきて停まる。

白河、降りてモンキーストアを眺める。
誰かに電話をかける。

○マンガ喫茶・個室（深夜）

寝ていた横手川、ビクッと起きる。
腕時計を見る。

やってしまった、という表情。

○ドギーマート・外（深夜）

横手川、やってくる。

白河、ガードレールに座って、酒を呑みながらタバコを吸っている。

白河「おう、遅かったじゃないか」

横手川「：仕事じゃないんすか」

白河「（苦笑）ま、好きにさせてくれや」

横手川「：」

○同・事務所（深夜）

横手川、入ってくると、山下が腕を組んで座っている。

横手川「すいません、遅くなりました」

山下「テメエ、潰す気か」

横手川「は？」

山下「俺の店を潰す気かあ！」

横手川「：だから遅刻したことは謝ってるじゃないすか」

無然とする山下。

スマホ取り出して、横手川に見せる。

そこには匿名掲示板の書き込みが。

“あそこの店員、暴行の前科あるから
夜勤の横手川ってやつ

そらマトモな接客できるわけない“

山下「自分の名前で検索してみろ。拡散して
るんだよ、既にな」

横手川「∴」

山下「反論しねえってことは事実なわけだ。

家もねえのに架空の住所履歴書に書いてる
ってのも事実なんだろうな（退職届渡し
て）明日までに書いとけ。俺の店に犯罪者
はいらねえ」

横手川「∴山下さんにその権限あるんすか。

単なるバイトじゃないですか」

山下「店長とオーナーなら見逃してくれるっ
てのかわ？ あいつらバカだからなあ！

本部から伝達あってもテメエごとき擁護
してくれるかもなあ！」

間。

横手川、制服脱いで出て行く。

山下「おい、シフトは守らねえか！ テメエ
それでもコンビニ店員か！」

○T「2」

○ドギーマート・外（深夜）

横手川、出てきて、モンキーストアを
憎々しげに眺める。

そこに向けて一歩踏み出したところで、

白河「なんだ、お前こそ仕事はどうした？」

横手川「：辞めますよ。下らない」

白河「（笑）昔の罪でも暴露されたかい？」

横手川「だったらなんだよ：」

白河「いやなに、俺もさ。今の会社にや、

色々隠してたんだがね：人間誰しも罪は
ある。罪のない者だけ石を投げよ、か。

誰もが喜んで石を投げる時代さ。罪は
確かに贖われたってわけだ」

横手川「：なにいつてんのお前？ バカ？

分かったようなこと言いやがって：」

横手川「テメエになにが分かったよ！」

ああ！？つかお前なんなんだよ！」

白河「タクシードライバーだ」

間。

横手川、モンキーストアに向かつて歩き出す。

と、白河、タクシートのトランクから金属バットを取り出して、背後から横手川を殴りつける。

倒れて意識を失う横手川。

白河「：背中（せな）で泣いてる、タクシードライバーだ」

白河、モンキーストアに向かう。

○モンキーストア・売り場（深夜）

白河、入ってくる。

雑誌の品出し中の永瀬、振り返って、

永瀬「いらっしやいませー」

白河「いらっしやいました」

白河、バットを雑誌棚に振り下ろす。

永瀬、飛びずさる

白河、店内を破壊していく。

永瀬、カウンターの奥に引っ込んで、

永瀬「ちよっと！ やめて下さいよ！ 警察

呼びますよ！」

レジスターにバットを振り下ろす白河。

永瀬、隅っこに縮こまる。

白河がふと外を見ると、外にスマホで

白河を撮影している黒川が立っているのが見える。

○同・外（深夜）

白河、出てきて黒川を睨む。

白河「相変わらず仕事が早いねえ、お前さんは。おかげでまた職を失ったよ。今度は誰に雇われてる？ ココのガキか？ 随分ケチな真似するようになったじゃねえか」

黒川「クラウドで同期している。もし俺に

手を出せば、実名・住所と共に映像はネットに放たれる」

白河「ハナっからそのつもりだろうがよ。ま、関係ねえやな。お前を殺して、俺はムシヨでのうのうと生き延びる。俺の勝ちだ」

黒川「…」

白河「だが、それじゃ面白かあない」

白河、バットを放り捨てる。

白河「どうだ、そんなもの捨てないか？」

なに、俺の犯行は防犯カメラに映ってる。お縄頂戴すんのも時間の問題だ。お前さんも、よく知ってるはずだ」

黒川「…」

白河「ケリを着けようじゃねえか、死神。

それとも、ガキの小間使いのまま死ぬかい？」

間。

黒川、スマホを捨てる。

○ひとけのない公道（深夜）

車道の一方に白河のタクシー、そのずっと先に黒川の車が停車している。

双方ともエンジンをふかしている。

○モンキーストア・売り場（深夜）

永瀬、破壊された売り場に立ち尽くしている。

山下の母「下さいな」

見ると、山下の母が何冊ものマンガ雑誌を手にレジに立っている。

山下の母「地震？」

○白河のタクシー車内（深夜）

妻と娘の写った昔の家族写真を眺めている白河。

間。

懐に写真しまい、車を発進させる。

○黒川の車の車内（深夜）

黒川、十字を切って、発進させる。

○ひとけのない公道（深夜）

白河と黒川のタクシー、スピードを上げて一直線に互いに向かっていく。

○倒れていた横手川、苦しげに目を覚ます

○白河のタクシー車内（移動中・深夜）

白河、物凄い形相で、

白河「黒川あああ！」

衝突しそうになるその瞬間、白河、悲鳴を上げてハンドルを切る。

その先の歩道には、マンガ雑誌の入ったコンビニ袋を持った山下の母がいる。

○モンキーストア・事務所（深夜）

酒に酔って寝ている緒方。

と、外から物凄い衝突音。

緒方、ビクツと目を覚ます。

緒方「（事務所出て）いらっしやいませ！」

○事故を呆然と眺める横手川

○T「1」

○山手線の駅A・改札前

バッグを担ぎ、駅を眺めている横手川。
携帯が鳴る。

画面を見ると「ドギーマート」とある。
間。

後ろを振り返る。

また駅を見る。

携帯は鳴り続けている。

* * *

座ってタバコを吸っている横手川。

携帯の着信履歴にあるドギーマートの
文字をじっと見つめる。

と、見知らぬ番号から留守電が入って
いることに気付く。

再生すると、

白河の声「よお、俺だ。タクシードライバー
だ。番号は山下から聞いたよ（笑）急な電
話にお前は驚いているだろうな」

白河の声「なに、大したことじゃない。ただ一言言ってやりたくてな：そうだ、最初に言っておこう。おそらく、コイツをお前が聞いているとき、俺はもうこの世にいないか、あるいはお縄を頂戴してる。今度はもう、解いてもらえないお縄さ：お縄か（笑）おかしいよな。俺はSMクラブを経営していたこともある。縛り方も色々あるが、まさか俺自身——」

機械音声がそこで録音終了を告げる。

横手川「：」

○ドギーマート・事務所（夜）

横手川、制服に着替えている。

横で小野寺がマンガ雑誌を読んでいる。

と、喪服の山下、入ってくる。

横手川と小野寺、山下を見る。

小野寺「ヤマさん、どうしたの？」

山下「どうしたもこうしたもねえ、シフトだろが」

小野寺「シフトって：通夜どうしたの、
通夜。お母さんの」

山下「(制服に着替えながら) 終わったよ」
小野寺「いやいやダメだよ、一晩ついてない
と。行ってきなつて、横ちゃん来てくれた
から」

山下「ごちやごちや抜かすんじゃないよ！
ここは俺の店だ！」

間。

小野寺「おかしいよ、アンタ」

山下「：おい、誰に口利いてる」

小野寺「アンタだよ」

山下「テメエ、何様のつもりだ」

小野寺「バイト様だよ」

山下「：バイトなら仕事に手え抜いていいつ
てか！ ああ！？」

小野寺「いやいや、そういう問題じゃないで
しょ。意味わかんない——」

山下「じゃどういふ問題だ！」

小野寺「マトモに話もできやしない：」

山下「言ってみろ！　　どういう問題だ！」

小野寺「なんで人に当たるんかな：あのね、
じゃあ言わせてもらうけどね、こうなった
のもコレ、結局ヤマさんのせいじゃない」

山下「あ？　俺の店で猿どもがハバリかせて
んのをテメエ黙って——」

小野寺「いや、だからさ、それがおかしいの
よ、アンタ」

山下「おかしいのはテメエだろ！　　テメエそ
れでも俺の店の店員か！」

小野寺「普通じゃないの。普通じゃないの。

ね？　大体アレ、母親の通夜抜け出して
コンビニバイトって、どう考えても非常識
じゃないの」

山下「：常識守ってたらこの店守れんのかよ。
良い子ちゃんでしたら猿どもが手え引くと
思ってたのか。人が死んでんだぞ！」

小野寺「あのねヤマさん——」

山下「気安く呼ぶんじゃねえ！」

間。

小野寺「そ。ああそうかい」

山下「辞めちまえ！ このスパイ野郎！」

小野寺、憤慨した表情で出て行く。

と、ドアから顔を出して、

小野寺「スパイってなんだスパイって！

意味分かんねえんだよ死ねクソバカ！」

ボタンとドアを閉めて出て行く。

○同・売り場（深夜）

無言で雑誌の品出しをしている横手川
と山下。

カズとゴン、入ってくる。

山下、ボンヤリと二人を見る。

ゴン「おい、いらっしやいませはどうした」

山下「∴」

ゴン「なんとか言えこの野郎！」

山下「消えろ、殺すぞ」

ゴン「あ？ いまなんつった？」

山下「消えろ。殺す」

間。

ゴン「テメエお客様になんてことを！」

カズ「ゴン、もういい。この人になにを言っても無駄だよ。イイ歳してコンビニでバイトをしてる人なんだから、察してあげよう。でも、ダメな人は罰を受けなきゃいけない（スマホ取り出して）録音しておいたから、みんなにお知らせしてあげよう。誰かがきつと裁いてくれる」

山下「…」

ゴン「どうした？ またあのジジイに泣きつくか？ おい呼んでこいよ」

山下「…」

ゴン、笑う。

カズ「行こう」

カズとゴン、出て行く。

間。

山下、バッグヤードに向かう。

横手川、黙ってそれを眺める。

廃油の入った一斗缶を手にして戻ってくる。

売り場からライター取って、店を出ようとする。

横手川「どこ行くんすか」

山下「：テメエはクズだ。生きる価値も

ねえクズだ。テメエは何も出来やしねえ。

何も守れねえ何も達成できねえ。俺はテメ

エみてえなクズじゃねえ。この店を守る」

横手川「：」

○モンキーストア・売り場（深夜）

山下、入ってくる。

店内には誰もいない。

一斗缶の廃油を店内に撒きだす。

と、トイレから岡島が出てきて、立ち

尽くす。

岡島「：なにやってんですか？」

山下「燃やすんだよ」

岡島「燃やすって：それ燃えるんですか？」

「だったら逃げますけど」

山下「そうしろよ。テメエの罪も一緒に燃やしてやる」

岡島「え？ 俺なんかしましたあ？」

山下「自分の胸に聞いてみる！ テメエの胸はウソつきなんだろうけどなあ！」

間。

岡島「逆恨みもいいとこだよなあ。何もしてないって言ってるじゃないですかあ」

山下「ほざいてろ、テメエもうここにやいらねえよ。共倒れだ」

岡島「別に構いませんけどねえ」

山下「（立ち止まり）：テメエ何が目的だ？」

岡島「分からない人だなあ。目的もなににも、そんなものアタが勝手に作り出した虚像なんですってば。あーコワイコワイ。イラク戦争ってこうやって起きたんじゃないかなあ。俺、大量破壊兵器持ってないのに」

山下「はぐらかすんじゃないか！」

岡島「（嘲笑）無益で意味の無い労働が最も過酷な刑罰って、本当なんでしょうねえ。こうも言うな。五感を遮断されると幻覚が見えるっていうね。脳の防衛反応なんだろうな。耐えられないんですよ、なにも新しい情報が入ってこないことに。毎日毎日、同じコトの繰り返しで。なにも希望が見えなくて。コンビニバイトってそんなもんですよね。同情します」

山下「同情するなら死んでくれ。クズ野郎」
岡島「…ま、無駄な心中する前にちよつと待って下さい」

岡島、事務所に行く。
間。

岡島と一緒に、酒に酔った永瀬、緒方、黒川、小野寺、涼子が戻ってくる。

涼子「あ、どうもー」

山下、涼子見て啞然。

岡島「せっかくなんで、そんなことやめて一緒に飲みませんか？ 楽しいですよ？」

山下「…」

岡島、山下の肩を叩いて、涼子たちとともに事務所に戻る。

山下、それを呆然と眺めている。

○ドギーマート・売り場（深夜）

山下、トボトボした足取りで空の一斗缶を持って戻ってきて、ライターを売り場に戻す。

まだ雑誌の品出しをしている横手川、手を止めて山下を見る。

山下「…なんだそのツラ。文句があるなら
言え」

横手川「…」

山下「言いたい事があるんだろ？ 言えよ」

横手川「…」

山下、横手川に詰め寄り、胸倉を掴む。

山下「言えよ！ 救えねえクズだと思っ
てん
だろ！ 根性なしのゴミ野郎だと思っ
てん
じゃねえのかクソ野郎！」

横手川、山下を突き飛ばす。

横手川「：いい加減にしろよ」

横手川、山下を何度も蹴りつける。

一斗缶を投げつける。

悲鳴をあげる山下。

雑誌の品出しに使っていたハサミを
手にして、山下を睨みつける。

山下「や、やめて：友達でしょ？」

横手川「：」

横手川、ハサミを捨てる。

制服を脱いで店を出る。

山下、うずくまったまま、泣き出す。

○ドギーマートの外（夜）

横手川、店から遠ざかっていく。

横手川（VO）「どこもかしこも。静かに生
きさせてくれよ、ちくしょう」

○T「O」

○（回想）ドギーマート・外（深夜）

横手川の携帯に留守電を入れている

白河。

白河の声「俺はSMクラブを経営していた
こともある。縛り方も色々あるが、まさか
俺自身がお縄とはね。しようもない話さ。
だがソイツは結局、自ら望んだ縄なんだ。
自分で自分を縛り上げて、ダメな自分に罰
を与えてる。そうすることでしか、どうし
ようもないのさ。お前もそうだろ？ だか
ら、縄を断ち切れよ。お前なら出来るよ。
お前はまだ若いんだから：なあ：」

○（現在）ドギーマート・外

改装工事中。

ドギーマートの看板が外され、コンビ
ニ・ハートマートの看板が掛けられる。

○モンキーストア・事務所

オーナーの前に岡島・緒方・永瀬が
立っている。

オーナー「もう来ないでいいから。酒呑んで
勤務とかあり得ないよ。在庫盗んでさ」

岡島、苦笑する。

○ファミレス

小野寺と黒川、背広の男が座っている。

背広の男、小野寺と黒川に札束の入っ
た封筒渡して、

背広の男「あんまり目立つようなことしない
で下さいよ。訴訟沙汰になっても責任取れ
ないんだから。あと、今度からプロクレー
マー使う時は相談してね」

小野寺、適当に頷く。

背広の男「じゃ、またお願いしますよ」

背広の男、店を出て行く。

小野寺、窓の外を眺める。

小野寺「いつまでやんのよ、こんな仕事」

黒川「…」

背広の男が店から出てきて、ハート
マートの社用車に乗り込むのが見える。

○レンタルビデオ屋・売り場（夜）

店員の横手川、カズとゴンの接客を
している。

カズ「つまり、アナタたちは途中で再生が停
まってしまいうDVDを貸したけど、それで
お客様の損失した時間に関しては補償して
くれないってこと？」

間。

ゴン「お前、どつかで——」

横手川、ゴンの胸倉掴んで何度も頭突
きする。

カズ、呆然。

○山手線の車内（夜）

横手川、ボーっと座っている。

○山手線の駅B（夜）

横手川、バッグを担いで改札から出てくる。
立ち止まり、辺りを見渡す。
歩き出し、画面から消える。
間。

別の服を着て、画面に戻ってくる。
バッグ担いで改札を潜る。

○山手線の車内

ポットと座っている横手川。
外には夏景色が見える。

(○・L)

ポットと座っている横手川。
外には冬景色が見える。

(○・L)

ポットと座っている横手川。
外はまた夏景色。

横手川、山手線の丸い路線図を見る。

○T..十年後

○タクシーの車内（夜）

タクシードライバーの横手川が運転している。

後部座席では酔っ払った女二人が笑いながら騒いでいる。

○コンビニ・ハートマートの前（夜）

横手川のタクシーが停まる。

○タクシーの車内（夜）

横手川「着きましたよ」

客の女たちは笑っていて横手川の話聞いてない。

女たちを見る横手川。

横手川「お客さん、着きました」

客の女1「はい」

女1は財布から万札を取り出し、横手川に渡す。

横手川「細かいのありませんか？」

客の女1「ない！ ないない！」

溜め息をつく横手川。

外を見ると、かつてのドギーマート、今はハートマートとなったコンビニが見える。

横手川「すいませんちよっとお釣り無いんで、両替してきてもいいですかね？」

女たちは聞いてない。

無言で車を降りる横手川。

○コンビニ・ハートマート（夜）

横手川が入ってくる。

店内に店員の姿は見当たらない。

横手川は雑誌を一つ手に取ると、弁当コーナーに向かう。

弁当を適当に一つ手に取ると、レジに向かう。

横手川「すいませーん」

店員の声「はい」

ややあって、レジに店員の山下がやってくる。

横手川、山下を見て固まる。

山下も横手川に気付き、固まる。

下を向いて、会計を始める山下。

山下「740円です…」

横手川「すいません、万札しか無いんです

けど…」

山下「ああ、どうぞ…お弁当、温めます？」

横手川「すいません、お願いします」

弁当を温める山下。

沈黙。

やがて弁当が温まると、山下はそれを

袋に入れて横手川に渡す。

山下「ありがとうございます」

横手川「どうも」

去って行く横手川。

山下も事務所に引っ込んでいく。

と、横手川は立ち止まって、振り返る。

横手川「山下先輩」

ギクつとして振り返る山下。

横手川「頑張れよ」

山下 「タメ口かよ：お前も頑張れよ」

微笑む横手川。

それから、彼は店を出て行く。

しばらくして、タクシーは走り去る。

(了)